

特35

781

祭

詞

雜

稿

下

255

341

目次

文例の部

春(秋)靈祭詞
 靈祭 祓詞
 同奏上詞
 一年靈祭詞
 同墓參詞
 三(五)年靈祭詞
 十年靈祭詞
 五十年同

一 丁
 二 丁
 二 丁
 三 丁
 四 丁
 四 丁
 五 丁
 六 丁

明治二十七八年役北清事變招魂祭招魂詞八

同招魂祭詞

明治三十七八年役紀念碑建碑式詞

改式祭奏上詞

同招魂詞

同改式詞

同墓參詞

實例の部

元寇殉難記念祭詞

近藤氏妻岡田美真心玉露姫例祭詞十九丁

明治
43. 4. 21
内交

八 丁
 十 丁
 十一 丁
 十三 丁
 十三 丁
 十四 丁
 十五 丁

桂家祖靈祭詞

二十丁

安部古登大刀自一年靈祭詞

二十二丁

秋山小梅美香妙姬同

二十三丁

金光中學教員上野丹治郎彦同

二十四丁

陸軍砲兵軍曹井上行衛彦同

二十六丁

廣江支所長千田志滿姫三年靈祭詞

二十八丁

栗尾藤平大人五年同

二十九丁

贈大講義米田美功續根大人同

三十二丁

藤澤庄次郎大人同

三十三丁

贈權大講義秋山美真心常磐根彦十年同

三十四丁

香取美道興根真柱君四十年同

三十五丁

岡本興榮真柱大人四十年中堂橋能真盛
老翁二十年岡本豐榮真柱大人中堂氏妻同

三十七丁

若露大刀自十年岡本美真幸姫一年
久山高義真柱君百年久山義房真柱君早年
久山氏妻賢木枝貴子五年久山猪八郎義敬同

三十八丁

伊豆功根大人久山氏妻美真心月照姫五年

同墓參詞

四十二丁

贈中講義茨木道興岩根彦建碑式詞

四十二丁

祭詞雜稿下

文例の部

春(秋)靈祭詞

(教會所祖靈舎にて祭事
を行ひ奏する詞なり)

此れの祖靈舎に合祀り座せ奉る靈神等及教徒
 諸が其の家々に齋ひ鎮め奉れる遠祖世代の祖
 等親族之靈神等に白さく今日はも
 天皇は大宮内にて躬親ら
 皇祖等歴代の聖靈の大御前を齋ひ奉らせ給ふ

生日いくひの足日たるひにしあれば斯かく靈神等みたまたちの御前みまへをも
拜をろがみ奉まつるとして種々くさくの味物ためつものを机代つくろしるに置足おきたらはし
供をなへ奉まつらくを相諾あひうへなひ聞きこし食めし給たまひて我わが大神おほかみ
の深ふかく厚あつき御愛撫みつくしみを蒙かよふり教祖をしへみおやの神かみの高たかく廣ひろき
御陰みかげに隠かくろひ各おのもくが現世うつしよに立置たておきし功績いさをの隨御靈まにくみたま
の位くらわをも進すすめ高たかき神列かみのみつらに入り坐まして其そのの家々いえく
の遠とほ永ながき守護神まもりのかみと子孫うみのこの八十連やろつとせき續つに絶たゆる事こと
なく嚴いかし彌木榮やまくはねの如茂盛ごとむくさかに立榮たちさかえしめ給たまへと

謹つとみ敬わやまひ拜をろがみ奉まつらくと白まをす

靈祭祓詞

掛卷かけまくも畏かしこき祓戸はらひどの大神等おほかみたちの御前みまへを遙はるかに拜をろがみ奉まつ
りて白まをさく今日けふはも此これの「姓」の家いえの氏神うぢのかみと持もち
齋いつく御靈みたまの御祭執行みまつりどりおこなはむとす故教師かれをしへびとを始はじめて
御前みまへに列つらなれる親族うから家族やからもろく諸あやまちおかが過犯あやまちおかしけむ罪穢つみけがれの
有あらむをば科戸しなどの風かせの祓はらひ給たまひ清きよめ給たまへと畏かしこ
み畏かしこみも白まをす

同奏上詞

此れの神床に齋ひ奉り鎮め奉る掛巻も畏き天
地金乃神教祖金光大神足珍の御前に畏み畏み
も白さく今日の生日の足日に此れの「世」の家の
氏神と齋ひ奉れる靈等の祭執行はむとする状
を奏上奉らくを熟らに聞こし食し給ひて我大
神の廣く厚き神幸の隨靈の階級をも上げ給ひ
進め給ひて限りなき歡樂をも享けしめ給へと

御酒御饌を捧げ置き乞祈奉らくと畏み畏みも
白す

一年靈祭詞

此れの靈舎に齋ひ座せ奉る「謚號」之靈神の前に
白さく阿波禮去年の此月の今日こそは汝翁が
病の憂瀬に落ちて親族家族等の心盡しも其の
效驗なく惜らしき此現世を神避り坐し、日な
りけれかく早くも一年の月日は立還れるを還

り來坐さぬ汝翁を同心に戀ひ奉り親族家族等
思ひ出で偲び奉りつゝ此れの御前の御祭仕へ
奉る狀は汝御靈も幽冥より見し知らすべしか
く知らせば今は教祖の神の高き御蔭に依りて
貴き神の位に坐すらむ其の幸靈は彌遠に守り
給ひ幸へ給ひて家人睦び賑び親族等和ぎ合ひ
て禍津日の禍事なく子孫の八十續まで嚴し彌
木榮の如立榮にしめ給へと奉る禮自の御酒御

饌を平らけく安らけく聞こし食し諾ひ坐せと
白す

同 墓參詞

(三年祭以上に用ゐるも難なし)

「姓名」の奥城の御前に詣拜み奉りて白さく一度
現身の人生出し者は身罷りて其亡體こそ荒
金の土の元邊に歸れ其靈は常しへに消ゆる事
なく失する事なく即て靈神に坐すべきものを
阿奈畏特に其亡體を葬り埋めし御墓には其の

分靈の慕ひ來て寄り居坐すべき惟神の眞理に
ぞある故れ今日はも汝御靈の一年祭執行ひ「姓
の家の氏神と齋ひ奉れる靈璽の御前を治め奉
りて今は其の事竟へぬれば親族家族諸を率ゐ
連並め世に亡骸の空つ御靈を戀ひ偲び御酒御
饌を供へ奉り玉串捧げ奉る此狀を御心も轉樂
しく受諾ひ坐せと白す

三(五)年靈祭詞

「謚號」之靈神の前に白さく天雲の峰立分れ行き
て還らぬ事の如く山川の水の多岐知て淀まぬ
事の如く日の來經れば月も來經去りて汝翁の
幽冥に隠り坐しこより三年(五年)の月日も廻り
來ぬ故れ式の隨御祭仕へ奉らむとして靈舎の
内外も佐夜に拂ひ清め左右に眞榊の枝も多和
々に木綿取垂御酒御饌を始め種々の味物を御
前に置足はして捧げ奉らくを嬉しとも樂しと

も聞こし食し諾ひ坐して教祖の神の御蔭に依り鎮り限りなき歡樂を受け坐しつゝ彌益子孫の末の榮をも夜の守日の守に守り幸へ恵み導き給へと謹み敬ひ拜み奉らくと白す

十年靈祭詞

此れの小床に齋ひ座せ奉る「謚號」之靈神の前に齋主「某」謹み敬ひも白さく阿波禮璞の年の來經行くは最速けさむのなるかも汝翁の現身の世

を退去りて幽界の神府に坐す教祖の神の御許に參昇り坐してより早も十年になりぬれば廣く厚き御蔭を蒙りて今は神靈の位も高くこそ進み給ふらめ然れば其の幸靈は夜の守日の守に守り給ひ幸へ給ひて親族家族諸が家にも身にも枉神の枉事あらしめず子孫の八十續まで家門も嚴し彌木榮の如茂盛に立榮ほしめ給へと式の隨御酒御饌を始め海川山野の物又時時

の果實をも取添へ机代に満て並べ供へ奉らく
を甘らに安らに聞こし食し諾ひ坐せと謹み敬
ひ拜み奉らくと白す

五十年靈祭詞

此れの小床を忌まはり清まはりて齋ひ鎮め奉
る「謚號」之靈神の前に白さく春の花の咲きては
移ろひ秋の木葉の紅ぢては散り璞の年の來經
行くは最早さきのなるかも汝翁の現しき此の

世を退去り坐しより五十年になりぬ故れ此
を以て今日ばも其の式年祭仕へ奉らむとして
供へ奉る禮自の物と御酒を始め八穂米を忌し
り嚴しり搗きて鏡なす餅飯に海川山野の味物
を種々に取揃へ机代に置足はし榮ゆる物と榊
が枝に木綿取垂て奉る珍の幣帛を安幣帛の足
幣帛と平らけく安らけく聞こし食し諾ひ給へ
と白す斯く仕へ奉れば汝靈神の鎮り坐す幽冥

は今現身の人の目にこそ見えぬ我教祖の神の
神鎮り坐す所なれば其の廣き御蔭に隠るひ彌
益に厚き愛撫を蒙り次々に御靈の階級をも進
め高き神の位にも上り給ひ先祖等の御靈と諸
共に樂しく座坐さむ隨現世なる親族家族等が
家にも身にも病しく煩しき事なく日に異に成
務むる家業をも助け幸へ氏門高く廣く子孫の
末遠永く膠の木いんげんの彌次々に繁立榮えしめ給へ

と謹み敬ひ拜み奉らくと白す

明治二十七八年役北清事變 招魂祭招魂詞

明治二十七八年の戦役を始めて北清事變及明
治三十七八年の戦役に出征して或は戦死し或
は病に身失せ給ひし陸海軍官位勳級姓名等の
忠魂義靈い今日はしも招魂祭執行はむとして
此れの齋場に磐境仕へ奉り靈璽を造り備へ神
術仕へ奉る隨天翔り國翔り來て寄集ひ遷り座

坐せと白す

同 招魂祭詞

此れの齋庭に嚴の磐境立て廻ほし靈璽の眞柱
仕へ奉り招ぎ奉り坐せ奉る明治二十七八年の
戦役或は北清事變及明治三十七八年の戦役に
戦死し或は病の爲死歿せ給ひし英靈等の御前
に金光教何教會長職名姓名畏み畏みも白さく
汝命等はや千萬の軍なりとも言擧げせず誅り

て來ぬべき男子ぞと勇みに勇み建びに建びて
或時は牙山成歡より進みて平壤芝罘に又黃海
に威海衛に或時は太沽天津より北京まで攻入
或時は鴨綠江より始めて遼陽に沙河に若くは
旅順に奉天に又仁川沖に旅順口に或は日本海
に蔚山沖に戦ひに戦ひ勝ちに勝ちつゝ射向ふ
敵を打懲らし服はぬ者を撃罰め皇が御國の
大稜威を四方の國々に輝して身は遂に荒野の

露と散り失せ海中の沫と消え果て給ひし忠實
に雄々しき舉動は實に世の譽れ人の鑑とこそ
仰ぎ奉らるれ故れ今日を生日の足日と御前に
御饌御酒種々の物を献げ奉りて官吏公吏遺族
の人等と共に御祭仕へ奉れば吹く笛の音の亮
々に琴の調の清々しく聞こし食して朝廷を夜
の守日の守に守り幸へ給ひ英靈をば國內の人
共に配り幸へて負氣なくも御國に敵なす醜の

有らむをば罰め掃はしめ給へと畏み畏みも白
す

明治三十七八年
戦役戦病死者
紀念碑建碑式詞

堅磐に常磐に高き功績を偲び奉り國の鎮めと
仰ぎ奉らむと此れの紀念碑を建設けて招ぎ奉
り座せ奉る明治三十七八年の戦役に戦死し或
は彼の國の惡しき氣に冒されて病歿せ給ひし
英靈等の御前に金光教何教會長職名姓名畏み

畏みも白さく汝命等はや
天皇の醜の御楯と大詔を背に負持ち大稜威を
頂に捧げ奉り旭の御旗さしかざし怒猪の怒り
猛び出征して海行ば美豆く屍山行ば草生屍と
大伴佐伯の祖神の言立置かしく我軍人の常の
行を心として彌進みに進み射向ふ敵をば野に
山に直攻に攻落し只撃に撃撥ひ連戦連勝て
天皇陛下の大稜威を天の壁立つ極み國の退ぎ

立つ限り輝き渡らしめ皇國の大御光を潮沫の
到り留る極み八十の島曲に至るまで彌照に伊
照徹らしめ給ひし其勇猛く雄々しき行動こそ
は實に軍人の龜鑑ぞと萬世かけて仰ぎ奉らる
れ阿奈尊さかも故れ今日の吉日の美日に建碑
式執行むとして御前に御酒御饌を捧げ置き英
靈を慰め奉らむと仕へ奉らくを平らけく安ら
げく聞こし食し諾ひ給ひて

すめらみこと 天皇の大御代おほみよを手長たながの御代みよと堅磐かきはに常磐とこきはに齋いは
ひ奉りまつ茂いかしの御代みよと守りまも幸さきはへ給たまへと畏かしこみ畏かしこみも
白まをす

改式祭奏上詞

此これの神床かむせこに齋いはひ奉りまつ鎮めしづ奉るまつ掛卷かけまくも畏かしこき天
地ち金かね乃の神教かみをしへのみおやこんくわうたいん祖の金光うづ大神みまへの珍ちんの御前みまへに金光教こんくわうけう何
教會長けうくわいぢやう職名しやくめい姓せい名な畏かしこみ畏かしこみも白まをさく儀城島ぎじやうの金かね
刺さしの宮みやに大八洲國おほやしまくにしろしめ知召ちめいし

すめらみこと 天皇の御代みよに韓國からくにより佛像ほとけのかたと經論きやうろんとを大御國おほみくに
に奉獻たてまつし、より内日刺都うちひさすみやこを始はつめ天離あまなる鄙ひなの國邊くにべ
に至いたるまで次々つぎつぎに弘ひろまり益ますに布しき至いたり大御國おほみくにの
大御民おほみたまは悉ことごとく其そのの教をに依よりて葬儀執行はふりわさじりおこなひ年としま
ねく其そのが法のり以もて世代よの祖等おやたちを祀まつりつゝ有あり經へ
しを此これの姓名せいせいは性質うまれつみ敏みくして早はやくより我教わがを
祖みおやの大神おほかみの御教みをしへを蒙かよふり天地あめつちの美うまし眞道まことを悟さとり
得えて今回こたへ本教わがをの儀式のりに改めあらたむと請こひの隨まに今日けふは

も改式の祭執行むと五百枝眞榊が枝に菅芋白
木綿総やかに取垂榊葉の佐々耶々に清芋の清
々しく祓ひ清め大神の御幸を仰ぎ乞祈奉らく
を憐み給ひ愛で給ひて此家の世代の祖親族靈
神等を今日よりは神府に召上げて限りなき歡
樂をも享けしめ給ひ子孫の八十連續に絶ゆる
事なく嚴し彌木榮の如立榮えしめ給へと御酒
御饌を始めて山野の味物を机代に置足はして

獻け奉らくを平らけく安らけく聞こし食し給
へと畏み畏みも白す

同 招 魂 詞

此れの「姓」の家いへに持齋もちいつく遠祖とほつおや世代よのおや祖等たち親族やからの之靈みたま
神姓名何々之靈神等い今日けふはも汝靈神等いましみたまたちの改か
式の祭執行みまつりごとはむとして斯かく新あたらしく造つくり備そなへ
し珍うづの靈みたま璽しるに天あま翔がけり國くに翔がけり來きて寄集よりつぎひ移うつり鎮しづま
り坐ませと白まをす

同改式詞

此れの靈舎を祓ひ清めて齋ひ座せ奉る「姓」の家
の遠祖世代祖等親族之靈神を始めて「何々」之靈
神等の御前に白さく阿波禮汝等の身退り坐し
こ時は佛法以て葬儀執行ひたりしを此家の主
人「某」が早くより我教祖の御教を蒙りて高く尊
き恩頼を仰ぎつゝ天地の眞理を悟り異しき道
以て世代の祖等を斯く狀に祀らむは最も忌々

しと本教の儀式以て子孫の末遠永く仕へ奉ら
むとして今日はも汝等の御靈を改祭り鎮奉り
て御饗物には御酒御饌より始めて種々の味物
を捧げ奉り拜み奉る事の由を相諾ひ聞こし食
し給ひて今日よりは教祖の大神の深き厚き神
幸の隨彌廣に廣き所を得給ひ彌高に高き神位
に鎮り坐して限りなき歡樂を得給ひつゝ子孫
の八十續まで夜の守日の守に守り給ひ幸へ給

へと齋主「某」謹み敬ひも白す

同墓参詞

此れの奥城所に天翱り寄坐す「姓」の家の遠祖世
代祖等親族の靈等の御前に齋主「某」謹み敬ひも
白さく汝等の身退り坐し、時は佛の法以て葬
儀執行ひたりしを今回「姓名」が我教祖の神の御
教に依りて天地の美し眞道を悟り得て本教の
儀式の隨家内に鎮り坐す靈神の改式の祭執行

ひ已に其の事竟へぬれば今かく親族家族諸を
導き御前に連並めて各瑞の玉串持捧げ拜み奉
らくを空津靈も阿奈嬉しと諾ひ坐して今日よ
りは此れの奥城所を永久に變らぬ清き忌庭と
思はして轉樂しく鎮り坐せと白す

實例の部

元寇殉難紀念祭詞

百不足八十日日はあれと今日の生日の足日を

吉日の良辰と選び定めて元寇殉難紀念祭仕へ
奉らくと此れの教殿を暫時天の磐座と掃ひ清
めて贈從三位宗助國命贈正四位平景隆命を始
め文永弘安の役に身亡せ給ひし諸の稜威の御
靈等を招奉り座せ奉りて齋主金光中學生石高
等小學校職員惣代金光中學教頭佐藤範雄諸の
弟子等を率ゐて畏み畏みも白さく汝命等はや
去し文永より弘安と云ひし年の頃い蒙古の寇

ども荒磯の波の打かへし幾回か寇なひ來し時
しも皇大御國の御爲と朝に夕に思を深め力を
盡し加に加久と議りごちつゝ家忘れ身もたな
知らに討伐めむと或は壹岐對馬の沖に或は不
知火の筑紫の海にい行き渡らひ戦ふ端に汝命
等は遂に千尋の海の藻屑と失せ大野の原の露
と消え果てゝ皇大御國の大稜威を天下に輝か
し給ひしは實に忠に雄々しく光映あるわざに

はあれどはた慨た^{うれ}く悲^{かな}しき事^{こと}の極^{きは}みなりけり
嗚呼^{あはれ}現身^{うつつみ}の世^よは來^き經^へ行^ゆきて六百有餘年^{ろくひやくいしやうねん}を重^{かさ}ぬ
るも其^{その}の清^{きよ}く明^{あか}き眞^ま心^{こころ}は眞^ま澄^{すみ}の鏡^{かがみ}と眞^ま輝^{あかり}なり
しに世^よは伊^い賀^か古^こ山^{やま}如^い何^かに雲霧^{くもきり}の起^たち掩^{おほ}ひたる
が如^{ごと}暗^{くら}かりけむ今^{いま}更^{さら}に往^{むか}昔^しを懷^{おも}へば轉^{うつ}女^め々^々し
き情^{こころ}のみぞ催^{もよほ}さるゝ爰^{こゝ}に湯^ゆ地^ち丈^{たけ}雄^{をと}の大^{まさ}丈^{すら}夫^をは
や汝^{いまし}命^{みこと}等^{たち}の國^{くに}の爲^{ため}家^{いへ}さへ身^みさへ滅^{ほろ}されし跡^{あと}の
埋^{うめ}木^{れき}と埋^{うめ}れ果^はてたる御^み墓^{はか}所^{どころ}の何^{いづ}處^こにか有^あるら

むと岩^{いは}根^ね木^き根^ね踏^ふみさくみつゝ尋^{たづ}ね廻^{めぐ}りて其^{その}を
見^み顯^{あら}はし又^{また}當^{かみ}時^い戰^{いくさ}場^のなりし筑^{つく}紫^しの國^{くに}なる千^ち代^よ
の松^{まつ}原^{ばら}に紀^さ念^{ねん}の碑^{いし}を建^た設^けけむと勤^{いそ}しみ勞^{いた}くと
して其^{その}の功^{いさ}績^をの著^{いち}明^りしかりし狀^{さま}を八^や意^{こころ}の思^{おも}兼^{ひかね}
て矢^や田^{たの}一^{いつ}嘯^{しやう}といへるに見^みれば魂^{たま}も消^きぬ思^{おも}へば
腸^{はらはた}も斷^たぬむばかりにすさましく將^{はた}倭^{やまと}心^{こころ}も朝^{あさ}日^ひ
に匂^{にお}ひ嚴^{いっ}の利^と心^{こころ}振^{ふる}ひ興^{おこ}る計^{はか}りに勇^{いさ}ましく大^{おほ}油^{あぶら}
繪^えに書^かき出^いでしめひたすらに細^{くは}戈^{しほ}千^ち足^{たる}の國^{くに}の

御手振を知らしめ今の世の誠薄すけき人の心を
をも雄々しく忠々しきに挽き回さむと郷とな
く島となく天雲のい行き巡りて楫の音の都々
婆々良々に説き示し教へ諭してあるは實に汝
命等の御使とも仰ぎ稱へつべくなむ故れ今此
れの教殿の内に掛廻らす其の圖よ彼の雲の如
霞の如群衆つゝ射向ふ醜の夷等を討拂はむと
陸に海に野猪の勇みに勇み建びに建びて戦ひ

坐しけむ當時に今直に遭ふ心地のせられてそ
ぞろに髪も逆立ち腕も取しばらるゝになむ嗚
呼汝命等のかゝる御功績のあらすば今日はし
も己等の如何でかは斯くてあらむ今御盛の大
御代となりて汝命等の眞玉なす清き明き誠の
心は其の御名と共に彌天下に顯はれ今ゆ後霧
島山の彌高に五十鈴の川の彌永に萬代かけて
照り亘り行き即ては皇が大朝廷の大御祭にも

預り給はむと思へば御心も慰まるべくなむ範
雄い許多の月日の中にも世の業繁く將障る事
ども有りてしも今日は神幸の尊かりけむ心静
に有志の者と諸共に御酒御饌を供へ奉り御靈
慰め奉らむとて此御祭仕へ奉る状を甘らに
聞こし食して今も將來も沖つあた浪寄せ來む
ことの有らむをば天翔り國翔りつゝ稜威の御
靈を幸へ給ひて皇が朝廷を堅磐に常磐に守り

給ひはた湯地丈雄が忠々しき此事業を平らに
安らに成し竟へしめ給へと畏み畏みも白す

近藤氏妻岡田美眞玉露姫例祭詞

此れの本部なる教殿の祖靈舎に齋ひ奉り座せ
奉る中講義二等脩信講師岡田美眞心玉露姫之
靈神の御前に大講義「安藤喜三郎」謹み敬ひも白
さく嗚呼汝姫が大明媛の功德を仰ぎ奉り慕ひ
奉ると大明講を結び置き給ひし其の組員等今

日の生日の足日に大教會所の廣前に參上り汝
姫の毎年の例祭仕へ奉らむとして御酒に御饌
に菜に魚に藻菜に果實に種々の味物を取々に
取揃へ高々に置足はし捧げ奉りて拜み奉る状
を熟らに聞こし食し諾ひ坐せと白す
斯く仕へ奉れば汝姫は現世と隔りて冥府の見
ぬ境に座坐せども御靈ながらに樂しと見そ
なはすらむ嬉しと聞こし食すらむ亦今御前に

額突き拜み奉る者等の心にも汝姫が世に在し
し時の事等を種々に思ひ出づらむ阿波禮汝姫
も現世に坐しなば加に加久と夫の君をも扶け
心盡して道の榮えをも計り坐すらむ神籬を仰
げば在りし面影の親しく向ふ心地こそすれと
詠し歌の心を偲ばれける斯くて汝姫はや現世
に坐し間家の爲道の爲に眞心盡して立置き
し功績の多かれば我大神も深く愛で給ひ教祖

の神の厚き御治を蒙り給ひて高き神位にも鎮
り坐しなむ然れば今ゆ後現世なる藤守の君は
更にて明道の若葉の春の榮をも又此れの大
講の者等が家をも身をも茜刺す日の守奴婆玉
の夜の守に守り給ひ幸へ給へと謹み敬ひ拜み
奉らくと白す

桂家祖靈祭詞

桂家の氏神と持齋く遠祖世代祖等親族之靈神

を始め桂勘右衛門彦之靈神桂萬藏老翁之靈神
桂儀兵衛老翁之靈神桂重兵衛老翁之靈神桂八
十吉老翁之靈神桂登喜大刀自之靈神桂賀根大
刀自之靈神桂都由大刀自之靈神桂彌壽大刀自
之靈神桂久米大郎女之靈神桂儀助老翁之靈神
桂宇助老翁之靈神桂美世大刀自之靈神桂天字
大刀自之靈神桂徳太郎老翁之靈神桂太三郎老
叟之靈神桂兵藏老翁之靈神桂勘助彦之靈神桂

志計姫之靈神室屋家遠祖世代祖等親族之靈神
室屋勝次郎老翁之靈神等の御前に齋主權少講
義安部喜三郎拜みて白さく阿波禮此れの松平
はしも我教祖の眞道を教へ導き説き諭し皇國
の爲に誠心を盡し
天皇の大御惠の百千々の一つをたに報い奉ら
むとして去し明治二十二年になも不知火の筑
紫の豊國にい渡り此れの堅町にしも教會所を

設立け汝靈神等を此れの靈舎に鎮め奉り座せ
奉りし事になもありける斯れば汝靈神等は我
大神の高く廣き御蔭に隠るひ教祖の神の深く
厚き愛撫をも蒙り坐して今は貴き神列にも鎮
り坐しぬらむ故今日はも靈璽の御前を治め奉
らむと請の隨己喜三郎齋主として齋部諸を率
る御酒御饌種々の味物を机代に置足はし拜み
仕へ奉らくを嬉しとも樂しとも聞こし食し相

諾うへなひ給たまひて今いまゆ後のちこれの松まつ平へいを助たすけ導みちびき子孫うみのこ
の末すゑ遠とほ永ながく守まもり惠めぐみ立たち榮さかえしめ給たまへと謹つしみ敬むやま
ひも白まをす、

安部古登大刀自一年靈祭詞

此これの小床をこに齋いはひ座ませ奉まつる安部古登大刀自あべのこ登おほと
靈神みたまの前に大講義安部喜三郎謹つしみて白まをさく阿あ
波禮汝刀自はれいましと現世うつしよの事こと竟をへて幽冥かくりよに隠かくり坐まし
しは云年このちの此月このつきの今日けふなりけり斯かく一年ひととせの月つき

日は早はやくも廻めぐり還かへれるを歸かへり來坐きまさぬ汝刀自いましと
を戀こひ偲しのびて親族うから家族やから諸寄集もろくよりつぎひ式のりの隨御祭仕まにくみまつりつかへ
奉まつらむとして御饌みけに御酒みさに餅飯もちひの鏡かぐみを始はめて
海川山野うみかはやまぬの味物ためつものを種々くさくに取揃とりそろへ御前みまへに置足おきたらは
して捧ささげ奉まつらくを平たひらけく安やすらけく聞きこし食め
せと白まをす斯かく聞きこし食めしては今いまは我わが大神おほかみの御み
愛めでの隨教祖まにくをしへみおやの神かみの高たかき御蔭みかげに隠かくろひ廣ひろく厚あつさ
愛撫あいづくしみをも蒙かこり次々つぎぐに御靈みたまの階級しなをも進すすめ給たまひ

て安く樂しく鎮り座しぬらむ然れば今ゆ後家
人眠び睦び子孫の八十續まで彌茂盛に殖り榮
え行くべく守り給ひ幸へ給へと謹み敬ひ拜み
奉らくと白す

秋山小梅美香妙姫一年靈祭詞

此れの靈舎に齋ひ鎮め奉る秋山小梅美香妙姫
之靈神の前に權少教正安部喜三郎謹みて拜み
白さく阿波禮汝姫が病の憂瀬に落ちて親族家

族等の心盡しも其效驗なく遂に此世を退去り
坐しとば去年の一月の九日なりしが一年回れ
る其の忌日にはしも障る事のありて御祭も得
仕へ奉らざりしは最も不禮き事になむ斯れば
今日を吉日の吉辰と選び定めて靈璽の御前を
治め奉らむと仕へ奉る状は汝靈も幽冥より見
そなはし知らすべし斯く知らせば今は教祖の
神の御蔭に依り鎮りて廣く厚き御恵を蒙り坐

すらむ斯れば今ゆ後彌遠長に守り給ひ幸へ給
ひ子孫の八十次々嚴し彌木榮の如立榮にしめ
給へと御前に御酒御饌を捧げ置き玉串の取々
に拜み奉らくを嬉しども樂しども聞こし食し
諾ひ給へと謹み敬ひも白す

金光中學教員上野丹治郎彦一年靈祭詞

此れの小床に齋ひ座せ奉る故金光中學教員上
野丹治郎彦之靈神の御前に齋主少教正安部喜

三郎拜みて白さく嗚呼去年の此頃かも汝彦が
病の危篤れて遂に寶塚の湯氣と行方も知らぬ
中空に消失せ坐しより早くも月日の來經往
て此れの明治三十五年の十二月三日の今日は
しも一年回れる其の日になりぬ故れその御祭
に己齋主任へ奉るにつきて汝彦の一世の事蹟
を言擧げ稱へて忍び奉らむ阿波禮汝彦の家は
もよ高屋村にても高く榮ある氏の流れと垂乳

根の父母の恵と初等の學校は云ふも更なり中等の教育を卒へて後には専ら醫學を修め坐ししが中途障ることの出で來て遂に教育の道に干渉り金光中學に教の鞭を執るに至りしは去し明治三十年の初雁音の音なふ頃になむありける斯くて汝彦はも資質の忠實に敏才く許多の學科にも通ひ坐しければ日に異に教場に子弟を導くにも言葉は文に教は深切に眞心盡し

て勤務坐しを嗚呼斯く一年の靈祭仕ふる靈神と成り給ひしこそ術なけれ況して奴延草の妻の刀自今は此家の主と手弱女ながら家の事等治めつこも朝夕に汝が在し世を思ひ出で偲びながら御祭仕へ奉る心の内をも知らし坐すらむ斯く知らし坐しては此の家の内外も穩に事なく治めしめ齊へしめ子孫の末遠永く夜となく晝となく守り恵み幸へ給へと御酒御

饌種々の味物を捧げ置きて拜み奉らくと白す

陸軍砲兵軍曹井上行衛彦一年靈祭詞

陸軍砲兵軍曹井上行衛彦之靈神の前に白さく
阿波禮汝彦はや明治三十七八年の戦役に従ひ
大君の御爲皇國の御爲と建び進み攻戦ひ遂に
戦死爲給ひしは去年の此月の今日なりけり阿
波禮月日の來經往は最早くして一年の御祭の
回り來ぬれば親族等寄集ひ靈璽の御前を忌ま

はり清まはり御酒に饌御に海川山野の物に種
種の味物を机代に置足はして拜み仕へ奉らく
を甘らに安らに聞とし食し諾ひ給へと白す斯
く仕へ奉るに依りては汝彦が戰場に立て給ひ
し高き勳功を稱へて慰め奉らむ嗚呼汝彦はや
去し明治三十七年四月にしも滿洲に出征して
岫巖を始め遼陽は云ふも更なり沙河の戦鬪に
も参加り三十八年の二月奉天附近の大會戦に

は進みて北長嶺西北方高地に砲兵陣地を敷設
き已が率ゐる兵士を指揮さ大砲の音の轟々に
攻戦ひ坐しゝがその三月三日にしも敵の砲丸
に打中てらえ空し烟と消失せ給ひし事は今更
に最惜らしく憫び奉らるゝになむ然は云へど
も汝彦が大君の御楯我ぞと身をも命をも願す
誠心の唯一筋に盡して立置き給ひし大さ勳功
は後世かけて稱へ奉り軍人の鑑とこそ仰ぎ奉

らるれ故今回其を賞給ふと功七級金鷄勳章并
に年金百圓及勳七等青色桐葉章を授け賜ひ特
に金六百九拾圓をぞ賜ひける阿波禮畏さ行賞
ならずや阿波禮尊さ榮譽ならずや斯れば我大
神等も廣く愛で給ひ厚く撫み給ひて御靈の階
級をも進め高き神位にこそ鎮り給ふらめされ
ば其の幸靈の眞幸く奇靈の奇しく親族家族の
前に立ち後に添ひ夜の守日の守に守り給ひ惠

み給へと謹み敬ひも白す

廣江支所長訓導千田志滿姫三年靈祭詞

此の祖靈舎に齋ひ鎮め奉る故金光教會廣江支
所長訓導千田志滿美道妙姫之靈神の前に權中
講義安部喜三郎拜みて白さく阿波禮汝姫が現
身の此世を離り神府に參昇り坐しこより梅の
花咲きては移り天津雁往ては歸り玉筐三年の
月日も回り來ぬ故れ式の隨御祭仕へ奉らむと

して靈舎の内外も佐夜に拂ひ清め左右に眞榊
の枝も多和々に木綿取垂で御饗物には御饌御
酒より始めて海川山野の物等を机代に置足は
し玉串の取々に拜み仕へ奉らくを甘らに安ら
に聞こし食し諾ひ坐せと白す
斯くて汝姫はも生涯を斯道の爲真心の唯一筋
の務勤しみて立置きし功績の多かれば我大神
の厚さ御治を蒙り教祖の神の御許近く仕へ奉

り御靈の位をも進め貴き神列にも鎮り坐すら
む然れば今ゆ後彌益教會の榮を守り助け信徒
諸を恵み導き子孫を八十續に嚴し彌木榮の如
立榮えしめ春秋の御祭をも絶ゆることなく怠
る事なく仕へ奉らしめ給へと謹み敬ひ拜み奉
らくと白す

栗尾藤平大人五年靈祭詞

此れの小床に齋ひ奉る栗尾藤平大之靈神の前

に齋主權少講義安部喜三郎拜みて告白さく武
士の荒木の眞弓一筋に思ひ返せば久方の月毛
の駒の最早くも月日來經行きて今日は早汝大
人が可惜此現世を避りて幽冥に座す我大神の
御許に参昇り坐しより五年祭仕へ奉るべき
日を回り來にける故れ靈璽の御前を忌まはり
清まはり汝大人が現世に坐し間家の爲世の
爲に盡し給ひし深かりし御心を憚び高かりし

行跡を仰ぎつゝ額突拜む事状を禮代と捧ぐる
御酒の甘らに御饗と供ふる魚の平らけく諾ひ
聞こし食せと白すかく聞こし食しては今は我
大神の廣き御蔭に依り教祖の神の深き愛撫を
蒙りて高き神位にも鎮り給ひ先祖等の御靈と
諸共に相樂しく坐し座さむ隨彌廣に彌遠に茜
刺す日の守奴婆玉の夜の守子孫諸を惠み助け
家の内外も立塵の騷なく家人諸をば夏引の手

引の糸の亂るゝ筋なく治めしめ齊へしめ給へ
と細棒中執持ちて謹み敬ひも白す

贈大講義米田美功績根大人五年靈祭詞

此の靈舍に齋ひ鎮め奉る贈大講義米田美功績
根大人之靈神の御前に金光教八鹿教會長權中
講義兒島菊太郎謹み敬ひも白さく阿波禮慕は
しきかゝり米田吉正の大人はや阿波禮尊さかゝり
美功績根の靈神はや汝大人が現世に在せし間

世の爲に盡し道の爲に仕へて立置き給ひし功績の條々は今更に稱へ奉らむも中々なり只臨終の極に長男又一郎に遺言坐し一言を言擧げせば八鹿の御廣前の立行様にせよ御廣前が立行ば米田の家も立行を」と此一言葉や我大神の廣く厚き御神恩を謝び奉りて其を子孫の末の末まで教へ傳へ彌益に高き神徳を仰ぎしめむものぞとの御心になむ阿奈尊さかも然れば

眞名子又一郎が其の御心を心として家の爲勵み勤み斯道の爲眞心の唯一筋に仕へ奉る隨教會所の教務の彌張に張行くと共に米田の家の彌榮に立榮ゆるを最も最も畏かりける故れ今日はも五年の御祭仕へ奉らむとして親族等寄集ひ禮自の物と由貴の御酒餅飯の鏡を始めて海川山野の味物を種々に取揃へ机代に置足はして捧げ奉らくを平らげく安らげく聞こし食

し諾ひ給へと白す

斯くて汝大人はも現世に坐じ、間世の爲斯道の爲立置き給ひし功績の多かれは我大神の御治も一層厚く教祖の神の御愛も最深く御靈の階級をも次々に進め高き神位にも鎮り坐して限りなき歡樂をも享け給ふらむ斯れば今ゆ後又一郎が日に異に成し務むる家政を助け輔ひ親族家族諸が家をも身をも守り幸へ子孫の八

十續まで彌茂盛に立榮えしめ給へと鶴自物頸根突抜きて敬ひ拜み奉らくと白す

藤澤庄次郎大人五年靈祭詞

此れの靈床に齋ひ座せ奉る藤澤庄次郎大人之靈神の御前に少教正安部喜三郎拜み告白さく汝大人が此現世を離りて幽冥の神府に參昇り坐し、より何時しか月日の來經行璞の年を重ねて今年はも早五年の御祭の回り來ぬれば靈

璽の御前を治め奉らむとして御酒に御饌に餅
飯の鏡を始め種々の味物を机代に置足はし供
へ奉らくを平らけく安らけく聞こし食せと白
す斯くて汝大人はも現世に在し間道の爲教
會所の爲心盡して立置し功績の多かれは我大
神の廣き御治を受け教祖神の厚き愛撫を蒙り
給ひなむ故れ今回我管長の君よりも木盃を賜
りければ此を忝けなみ嬉しむ奉りて今ゆ後幸

靈の眞幸く幸へ給ひ親族家族睦び合ひて藤澤
の家の内外は立塵の騷なく子孫の八十續まで
奴婆玉の夜の守茜刺日の守に守り恵みて嚴し
彌木榮の如立榮えしめ給へと謹み敬ひ拜み奉
らくと白す

贈權大講義秋山美眞心常磐根彦十年靈祭詞

此れの靈舎に齋ひ座せ奉る贈權大講義秋山美
眞心常磐根彦之靈神の前に少教正安部喜三郎

拜みて白さく璞の年の來經行は早船の早さも
のなるかも汝彦が此現世を今はと見果て我教
祖の神の御許に參昇り坐しより十年の月日
は回り來ぬ阿波禮常磐根彦よ彦も尙世に坐さ
ば盛にまほぬべき齡なるを早く十年の昔の人
と偲び奉ること術なけれ曾も年を経て世の狀
態の遷り變る隨本教の事も次々に進み行く今
の時に在しなば眞心盡して道の爲勤み坐しな

むものをと思出惜み奉るになむ然はいへ汝彦
の靈は教祖の神の御許近く仕へ奉り廣く厚さ
御愛を蒙りつゝ家の子等を守り助け信徒諸を
恵み幸へ坐しつゝ幾年經とも限りなからむ故
彌益に高き神位にも座さなむ事を我大神に乞
祈奉りて今日の御祭仕へ奉る狀を平らけく安
らけく聞こし食し諾ひ坐して此れの教會の教
務は更なり子孫の末遠永く信徒諸が家業をも

彌榮いやすかえに榮さかえしめ給たまへと御酒みさけ御饌みけ種々くまぐの味物ためつもの
を捧たさげ置おきさて謹つとみ敬わやまひ拜まがみ奉まつらくと白まをす

香取美道興根真柱君四十年靈祭詞

此これの奥床おくどに齋いはひ座ませ奉まつる香取美道興根真柱かんとりのうましみちらおさねみはしらの
君之靈神きみのみたまかんじりのとさ香取常磐根真心老翁之靈神等かねまごころのおさなのみたまたちの御前みまへ
に權中講義安部喜三郎謹つとみ敬わやまひも白まをさく明あきらかに
治をさる御代みよの日に月つきに開化ひらけ進歩すすみ事物ものごとの變遷うつりかは
りつゝ璞あらたの年としを重かさぬる隨今日まにけふはも美道興根真うましみちおさねみ

柱君はしらのみきみの四十年祭しよんねんのみまつりに併あせて常磐根真心老翁とさねまごころのおさなの三
十年祭とんねんのみまつりをも仕つかへ奉まつらむとす阿波禮道興根真柱あはれみちおさねみはしら
の君きみはや汝君いましきみは常磐根真心老翁とさねまごころのおさなの御父みちちちに座まし
て又天地またあめつちの眞道まことのみちを開ひらき給たまひ教をしへ給たまひし我教祖わがをしへみおや
の御父みちちちの君きみなるこそ畏かしこけれ斯かくて我大御教わがおほみをしへ
の次々つぎぐに布至しきいたり益ますくおしひろままに押弘おしひろりて斯道みちちの光ひかりは彌高いやはたか
に教祖をしへみおやの功德みいさをは彌廣いやはろにい照てり輝かき渡わたらへるそ
の狀況さまを汝靈いましみたまも見みそなはしつゝ又其教またそのをしへの儀式のり

に依りて御祭を享け給ふこそ如何に嬉しとは
思ほすらめ斯れば常磐根真心老翁の御靈と諸
共に我大神の最厚き御治を蒙り給ひ高き神位
に昇り安く樂しく鎮り給ひて子孫の彌次々に
殖り榮え行くべく夜の守日の守に守り恵み幸
へ給へと由貴の御酒御饌を始め海川山野の味
物を種々に撰整へ御前に置足はし献け奉らく
を安御饌の豊御饌と甘らに安らに聞こし食し

諾ひ給へと謹み敬ひ拜み奉らくと白す

岡本興榮眞柱大人四十年中堂可美橋能眞盛老翁二十年
岡本豊榮眞柱大人中堂氏妻若霞大刀自十年岡本美眞幸姫一年 靈祭詞

此れの靈舎に齋ひ鎮め奉る岡本興榮眞柱大人
之靈神贈權中教正岡本豊榮眞柱大人之靈神贈
權中講義岡本美眞幸姫之靈神中堂可美橋能眞
盛老翁之靈神中堂氏妻松浦若霞大刀自之靈神
等の御前に少教正安部喜三郎謹みて拜み白さ
く阿波禮汝等の現身の吾世を退去りて幽冥の

神府に参昇り坐しより、僕わらたまの年としを重ぬる隨家まにくいへの業なりの立榮たちさかえ子孫うみのこの殖うまはり行ゆきつゝ、今日けふは興榮おきさか眞柱まはしら大人の四十年祭しよふねんのみまつりに併あはせて可美橋能眞盛老ましはらばなのみさかりお翁おきなの二十年祭にふねんのみまつり豊榮眞柱大人及若霞大刀自またわかかすみおほとの十年祭ねんのみまつり美眞幸姫うましまゆきひめの一年祭いちねんのみまつりをも総持すべもち仕つかへ奉まつるとして、献たてまつる御饗物みあへつものには由貴ゆきの御酒餅飯みさきもちひの鏡かきみを始はじめて海川山野うみかはやまねの味物ためつものを取とりぐに取揃とりそろへ御前みまへに置おき足たらはして捧ささげ奉まつらくを相嘗あひなめに聞きこし食めし諾うべなひ

坐ませと白まをす斯かく聞きこし食めしては豊榮眞柱大人とよさかまはしらのうしはしむ妻美眞幸姫みめうましまゆきひめと共に早はやくより我教祖わがをしへみおやの御み教をを蒙かよふり眞まことの道みちを悟さとり一向ひたふるに其業そのなりはひを勵はげみ敷妙しきたへの家いへを興おこし彌益いやすくに眞心まごころを凝こらして斯道みちの爲ため盡つくし坐ましむ功績いさをの多おほかれば興榮眞柱大人おきさかまはしらのうし橋能眞はらばなのみ盛老翁さかりおきなわかかすみおほと若霞大刀自等とらの御靈みたまを導みちびき我大神わがおほかみの高たかき御蔭みかげに隠かくろひ教祖をしへみおやの神かみの厚あつき御愛みいつくしみを蒙かよふり給たまひて次々つぎぐに御靈みたまの階級しなをも進すすめ高たかき神位かみのくらゐにも

坐しなむことを眞澄の鏡佐夜加に仰ぎ奉りて
今日の式年祭仕へ奉ると此れの御前に列れる
親家族諸の爲に細鉾中取持ちて今ゆ後子孫
の八十連續彌茂盛に立榮え行くべく守り給ひ
幸へ給へと乞祈奉らくを平らけく聞こし食せ
と謹み敬ひも白す

久山高義眞柱君百年久山義房眞柱君四十年久山氏妻賢木枝貴
廿五年久山義敬伊豆功根大人久山氏妻美眞心月照姫十五年 靈祭詞

此れの靈舍を忌まはり清まはりて久山氏の神

と齋ひ奉り家の柱と鎮め奉る久山高義眞柱君
之靈神久山義房眞柱君之靈神久山氏妻松田賢
木枝貴之靈神久山猪八郎義敬伊豆功根大人之
靈神久山氏妻今井美眞心月照姫之靈神等五柱
の御前に金光教教監權大教正佐藤範雄謹み敬
ひも白さく現世は奇しきものかも春の花秋の
紅葉と來經行く隨世代の祖等の高さ御業の恩
ばれつゝ今年はも高義君の神避り坐しゝより

百年もよせになりぬれば其その式年祭まつりに相兼持あひかねちて義房よしふさ君きみの四十年祭よんねんのみまつり賢木枝貴えひぢの廿五年祭にじふごねんのみまつり猪八郎義敬はちらうよしひる伊豆功根大人美真心月照姫いすのねのうしよしまごころつきてるひめの十五年祭とふごねんのみまつりをとり取と総すべ仕つかへ奉まつらむとす阿波禮人あはれひとの世よは年としを經へ世よの狀さま態たの變かはるに從したがひ時ときめき榮さかえし家いへも衰おとろへ其その名なの傳つたはり兼かぬる者ものさへあるに此これの久山家くやまのいへはや代々よよに立たち榮さかゆるは最尊いとたふときことにこそ其所以そのゆゑははしむ汝命等いましみことたちが其その始清はつめきよき真心まごころを以もて身みを修とよ

め家いへを齊ととのへ己おのが務つとめを締しまり勤いそしみ坐まし賜たまひにぞありける實けに汝命等いましみことたちは久山家くやまのいへの鎮しづめ子孫うまのこの心こころの鏡かぐみと仰あやぎ奉まつる氏神等うぢのかみたちなるかゝ阿奈尊あなとみ故立置たておき給たまひし事蹟ことわざを今言いまことわ挙げ奉まつれば此この家いへはもよ代よ々よ城主くにのかみより庄屋しやうやの職しやくに依よざり坐ましける事こととて高義君たかよしのみきみを始はめ義房君義敬大人等よしふさのみきよしひるのうし次々つぎつぎに其その受繼うけつぎ其職務そのつかさの爲力ためちからを盡つくし許多ことごとの功績いさをとを立たて給たまひける殊ことに義敬大人よしひるのうしはや十五歳とふごさいの浦若うらわかき

時より御父の後を襲ぎ坐し、明治の大御代
となりては戸長となり村長に擧げられ村の爲
誠心を盡し専ら世の裨益とならむ事を謀りと
ち給ひしのみならず常に妻真心月照姫と共に
厚く慈善の事業に志して貧困者を恤み厄難者
を救ひし事は今數ふべくもあらず人皆は其高
かりし行跡を仰ぎ清かりし御心を慕ひける
斯れば高義義房二柱の君を始めて賢木枝貴の

御靈と諸共に我大神の廣き御蔭に隠ろひ教祖
の神の厚き愛撫を蒙り次々に御靈の階級をも
進め高き神位に鎮り坐して限りなき歡樂をも
受け給ひつゝ座坐さむものと仰ぎ奉らるゝに
なむ然れば今ゆ後子孫の末遠永く茜刺す日の
守奴婆玉の夜の守に守り恵み幸へ給ひて今の
猪八郎夫婦相並び家の子等と共に益身を謹み
行を正しくし義敬伊豆功根大人の御心其儘に家

の産業を彌縋に縋りて氏門高く廣く立榮えし
め給へと清く赤き真心以て今日の御饗と奉る
種々の味物を平らけく安らけく相嘗に聞こし
食し給へと齋部諸を率る謹み敬ひも白す

同墓参詞

仰げば高さ立石山の常磐の松蔭に隠ろひ鎮り
坐す久山高義眞柱君久山義房眞柱君妻松田賢
木枝貴久山猪八郎義敬伊豆功根大人妻今井美

真心月照姫等の奥城の御前に詣拜み奉りて白
さく昨日の夕より汝靈神等の爲久山家の氏神
と齋ひ奉れる靈舎にて式の隨御祭仕へ奉り今
は其事竟へぬれば現世の慣と奥城の奥深く御
前を偲び奉らむとして親族家族諸を率る連並
め御酒御饗を捧げ奉り玉串の取々に拜み奉ら
くを空津御靈も阿奈嬉し阿奈樂しと相諾ひ聞
こし食せと白す

贈中講義茨木道興岩根彦建碑式詞

予うちゆうこうぎ いばらさのみち おき いはがね ひこの おくつき みまへ ざらが
贈中講義 茨木道興岩根彦之奥城の御前を拜み
のりまを いましひこ
告白さく 汝彦はや去し 明治二十四年の頃より
かして わがとしへみおや かみ みとしへ かよふ ま ちのち ひよふ
畏さや我教祖の神の御教を蒙り坐し、後は彌
こころ まこと ますくおこなひ たし しん しん ねん すす ちち
心を眞にし 益行を正しくし 信神の念を進め道の
まこと さき ねい ち に ち ふろくねん ちよ いちくわつ しんどう
眞を悟り得て 明治二十六年の十一月には神道
くわんちやう けうたうしよく さつか たま ちち ひとごも そし
管長より教導職を授り給ひ 遠近の人等を教へ
みちび さん ちよ ねん ろくくわつ こんくわうけうさ い けうくわいしよ たて
導さ 三十四年の六月に 金光教紀伊教會所を設

ま ひらさも こころ つく おほみち おしひろ みをしへ
立けては村肝の心を盡し 大道を押弘め 御教を
と さと まめ びともろく すく たす こた いさを た
説き諭し 信徒諸を救ひ助けて 許多の功績を立
たま めい ち さん ちよ ろくねん ちよ に くわつ このうつし
て 給ひしが 明治三十六年の十二月にしも 此現
よ ま か ま ちよ わがくわんちやう きみ より いましひこ
世を退去り坐し、かば我管長の君より 汝彦が
いさのかぎり みち ため つく ちち まごころ ほめたす
生涯を道の爲に盡したる 誠心を賞給ふとして
ちゆうこうぎ おく たま ちよ わ な たよと か 今
中講義をぞ贈り給ひける 阿奈尊さかも 故れ今
たび これの 石碑建設け 遠永に 其功績を 偲び奉ら
むと 御前に 御酒御饌を 捧け置き 御祭仕へ 奉ら

くを平たひらけく安やすらけく聞きこし食めし諾うべなひ坐まして
子孫うみのこの八十やうじゅう續ついでまで守まもり幸さいはへ信まめ徒びとも諸もろくを助たすけ導みちびき
教けうくわい會かいの榮さかえは往ゆく先さき掛かけて彌いや榮さかえに榮さかえしめ給たまへと謹つとし
み敬むやまひも白まをす

祭詞雜稿下終

おくかき

本書文例の部は畢竟初心の人等が彼れ此れ取捨するの煩を省き廣く應用に便ならしめんことを力めたれば文章自ら簡約に聘せて優雅の態に乏きもそは文作る人々の才學により亡人、靈主の出自、性行、功業等を適宜に挿入し辭句にも修飾を加へて美麗くものせんは心のまゝにて固より泥むべきにあらざればなり凡て祭詞は其の家門又は亡人、靈主が生前の品格或は齋主の地位等に因り敬語にも自ら輕重の別あらん又男女老幼に因りて用語

の異なるなども多かめれば其の程々に適へて違はざらん
やう心すべきことにこそ

編者しるす

明治四十三年四月五日印刷
明治四十三年四月十日發行

編輯
行輯
者兼

岡山縣淺口郡三和村大字大谷三百三十二
番第二地

安部喜三郎

印刷者

岡山市大字船頭町三十七番地

安井宇吉

印刷所

岡山市大字西中山下二丁目

山陽活版所



